

「明治百年」に見る歴史意識

—— 桑原武夫と竹内好を題材に ——

鈴木 洋 仁*

1. 本研究における問題の所在と展望・方法と対象、先行研究について

もはやほとんど忘れられた大騒ぎとして、「明治百年」をめぐる言説を取り上げたい。この対象を通して、知識人と社会との関係を問う知識社会学を試みる。

本研究では、「明治百年」をめぐる論争における、2人の知識人の言説を検証する。その2人とは、「明治」の再評価を唱えたフランス文学者・桑原武夫、「明治維新百年祭」を提唱した中国文学者・竹内好である。桑原が「明治の再評価」を唱えたのは、あまりにも名高い「もはや『戦後』ではない」という標語が世に出た昭和31年前後であり、それは「明治」以後、日本近代化百年の歴史を振り返る試みであった。そして、「明治百年」と同時に、「戦後二十年」を総括することばが飛び交っており、竹内は、双方に与していた。この2人のことばを通して、「昭和」という元号の下、「明治百年」なる形で、また別の元号が呼び出される過程を見る。この作業によって、往時の歴史意識のみならず、知識人と社会、学問とジャーナリズムの関係を明らかにする。

1-1. 本研究における対象と方法

では、なぜ、この2人なのか。現在の2人の状況を見れば、桑原武夫は、当時大きな影響力を持ちながら、いまとなつては、ほとんど研究者や好事家の間でしか流通しなくなってしまった。逆に、竹内好は、いまなお論じられ続けている。あるいは、当時においても、桑原は、政治的な論争からは比較的中立的なエッセイストにとどまり、いっぽうで竹内は、「60年安保」成立に抗議して勤務先の東京立大学（当時）を辞職するなど、政治的な姿勢を鮮明に打ち出していた。この2人を扱う理由は、そういった対称関係だけが理由ではない。

*すずき ひろひと 東京大学大学院学際情報学府博士課程

もちろん、他の論者（たとえば、三島由紀夫や「忘れ去られた思想家」・清水幾太郎（竹内洋 2012: 22）ではないのか、という問いは常につきまとう。たとえ、小熊英二が言うように「知識人の思想といえども、同時代において集団的に共有されていた心情と、無縁な存在ではありえないという立場」（小熊 2002: 21）に基づいたとしても、「あの論者や論点が取り上げられていない」という瑕疵からは逃れられない。

試みに、歴史意識をめぐる論争的な書『大東亜戦争肯定論』を著した林房雄について少しだけ見てみよう。「戦後の日本ナショナリズム復活の先鞭をつけた」（林淑美）とされる林は、鶴見俊輔をはじめとした『思想の科学』グループが著した『転向研究』（鶴見 1991）の中で大宅壮一とともに取り上げられる。その後も、三島由紀夫による「林房雄論」（三島 1963）をはじめ、山田宗陸著・『危険な思想家』（山田 1965）では、「戦後民主主義を否定する」論者として「告発」されるなど、存命中から常に論争含みの思想家として名を馳せていた。近年でも 2002 年に保守系雑誌『諸君！』が「林房雄『大東亜戦争肯定論』——どこが危険か」と題する特集を組んでおり、これまでに幾度となく論じられてきた。歴史社会学者・竹内洋のように「無念共同体¹⁾」（竹内洋 2011）の祖としての林房雄に着目する視点²⁾も、示唆的だと言えるだろう。

では、たとえば林房雄ではなく、なぜほかならぬこの 2 人なのか。その理由は、当時の社会状況にある。そして同時に本研究の方法とも密接に関わる。言い換えれば、同時代の学者からも、この 2 人が「明治百年」祭を提唱したと評価されており、また同時に、ジャーナリズムもそれに反応していたからである。それとともに、そのような、学問とジャーナリズム、あるいは、知識人と社会との相関性・双方的影響を見るために、本研究は、知識社会学という方法に依拠している。

まず、学問の側からの 2 人に対する反応を確かめておこう。歴史学者の荒井信一は、学術雑誌『歴史学研究』1968 年 2 月号の中で、1960 年に竹内好が「維新百年祭」を提唱したこと、さらに、その提唱は、桑原武夫の影響によるものだった点を指摘している（永原他 1968）。加えてジャーナリズムの側でも、この竹内の提唱を引き継ぐ形で、雑誌『思想の科学』が 1961 年 11 月号で特集「明治維新の再検討」を、また、『中央公論』も 1962 年 1 月号で「明治維新の意味」と題した特集を、それぞれ掲載している。両誌の座談会には、当然のように桑原と竹内が顔を揃えている。つまり、学問の世界でもジャーナリズムの領域でも、この 2 人が「明治百年」の提唱者であり、なおかつ、この問題を論じる代表であると認識されていたのである。

このように、桑原と竹内による「明治百年」をめぐる議論は、社会の集団的な心性を表現していたと考えている。田中角栄『日本列島改造論』をはじめとして、地方の郷土史から政府の公式行事に至るまで、さまざまな「明治百年」をめぐることばが飛び交っていた。桑原と竹内の議論は当時の社会状態の結果であるだけでなく、「明治百年」に関する複数の言説の中で、日本近代の特性や矛盾を考える点において、今もなお示唆を与えてくれるからこそ取り上げる

のである（小野 2012）。

さらに、桑原と竹内を取り上げる理由は、まさに竹内自身が述べた「ムード段階にある未発の思想」（竹内 1959: 8-9）という観点からも補強される。この「未発の思想」とは、社会心理学者・高橋徹が述べるように、体系や論理構造の面では完成されていないながらも、社会的な機能の面では圧倒的な威力を発揮する点で、まさしくマンハイムの言う知識社会学的対象にほかならない（高橋 1987: 193）。すなわち、「明治百年」をめぐることは、あくまでも「未発の思想」でありながら、そうであるがゆえに、圧倒的な訴求力をもち、学問の世界もジャーナリズムの世界も巻き込む点で、知識社会学の対象となるのである。

だからこそ、本研究における方法として知識社会学が選択される。浜日出夫によれば、以前の知識社会学の担い手は、「特定の社会的位置によって規定されることのない『自由に浮動するインテリゲンチア』」であった。しかし、ピーター・バーガーとトーマス・ルックマンを引きながら、「われわれが『現実』だと考えているものは、われわれがそれについてもっている常識的な知識と、この知識にもとづいて営んでいる相互作用を通して『現実』として構成され、維持されている」（浜 2012: 877）とするのが、知識社会学だと浜は述べる。知識人だけが担い手なのではなく、「現実の社会的構成という根本問題を扱う社会学の中心分野」（浜 2012: 877）になったのであり、このような立場としての知識社会学を本研究は選択する。

1-2. 先行研究をめぐる

既に触れたように、本稿執筆時点（2013年）での、桑原武夫と竹内好を扱った議論は対照的だ。

試みに、国立情報学研究所のデータベース CiNii で、「桑原武夫」と「竹内好」をタイトルに含む論文を検索してみると、それぞれ 83 件、241 件と、後者が、実に 3 倍にもものぼる。その内訳を見てみると、竹内が近年でも盛んに論じられているのに対して、桑原はその名を冠した「桑原武夫学芸賞³⁾」に関するものが中心であり、書かれたものの内実に即した議論⁴⁾は少ない⁵⁾。かつて桑原武夫が所長を務めた京都大学人文科学研究所で現在、助教の任にある菊地暁は、「桑原が、現在、どのように評価されているのか」というと、寡聞にしてほとんど消息を聞かない」と慨嘆する。そして、「桑原がいわゆる『専門的著作』をあまり残さなかったこと」と「海外渡航が日常化し、ネットで原典に容易にアクセスできる今日の研究環境が、限定された文献と現地体験に立脚した当時の研究を過去のものとした点」に、桑原が忘却されている理由を、菊地は求めている⁶⁾。そして、「『文学者』というより『歴史家』」、「『デスクワーカー』というより『フィールドワーカー』」、「『高級芸術』よりも『大衆文化』に関心がある」、「『フランス』よりも『日本』『中国』が本領である」といった「『逆説』を検討し、改めて、桑原にとって『フランス文学研究者』であることの意味を問い直そう」と試みている⁷⁾。

坪内祐三が述べるように、桑原は「肖像文学の名手」でありながら、「講話問題や 60 年安保、ベトナム戦争について語らせると、ただの倫理主義者になってしまう」（坪内 1997: 272-273）きらいがあり、文明論者としての顔は、ほとんど取り上げられていない。本研究では、「ただの倫理主義者」ではなく、「明治百年」といった「元号」を通して日本の風土の特徴を抽出した歴史家としての桑原武夫の可能性を救い出してみたい。

対照的に竹内は、近年にいたってもなお論じられ続けている⁸⁾。佐藤美奈子がまとめるように、竹内が提起した問いが、「未解決のまま時代を超えて引き継がれることにより、竹内の問題提起は逆に深刻さを増し、その意義を再確認され続ける」（佐藤美奈子 2006: 48）こと。これが、この竹内研究隆盛の背景である。とりわけ、代田智明が強調するように、「竹内好の日中比較近代化論」が「21 世紀の現在の私たち、とりわけ台湾を含む東北アジアの人々に、何を示唆し、提示するのか」を考察する視点（代田 2009: 1-12）から、アジア主義や「近代の超克」を捉え直す議論が行われている⁹⁾。

こうした先行研究との対比で言えば、本研究では、あくまでも「明治百年」をめぐる竹内の議論に着目する。むしろ、背後には「近代」をどう捉えるのか、という視点がある。また、先述のように、「竹内好の日中比較近代化論」をめぐる果てしなく議論が続いている。しかし竹内が「元号」表記ではなく「西暦」表記にこだわった姿勢に焦点を当て、「近代主義者」としての竹内好の可能性と限界を見定める。この点を、あまたある竹内好論の先行研究との差異として提示する¹⁰⁾。

2. 桑原武夫による「明治」を用いた時代区分

2-1. 桑原武夫とは誰か

桑原武夫とは誰か。教科書的な答えとしては、「フランス文学者」というのが正解だろうし、あるいは、半可通であれば、「京都大学人文科学研究所において、共同研究という手法を主導した」とか「エッセイストとしても名を馳せた」といった枕詞を付け足すかもしれない¹¹⁾。日本における東洋史学の創始者のひとり・桑原隲蔵（くわばらじつぞう 1870~1931）を父に持ち、幼少時から京都学派に親しんだ。戦前にスタンダールやアランを紹介するなど、哲学も文学も理解する古典的な知識人として 40 代までを過ごした。そして戦後は、京都大学人文科学研究所で今西錦司とともに共同研究の黄金時代を作った。さらに、研究や翻訳の傍ら、エッセイや評論も数多くものしたほか、各界の著名人らとも積極的に交流し、膨大な数の対談も残している。

その名を冠した桑原武夫学芸賞が、没後 10 年を期に『『多岐にわたる桑原武夫氏の活動に見合うようなジャンルの作品』を広く公募し、顕彰することによって、卓抜な同時代人・桑原武

夫氏の業績を永く後世に留めたい」¹²⁾との意図に基づいて設けられるほど名高い文化人であった。この「多岐にわたる」活動のなかで、本研究で取り上げる「明治の再評価」あるいは、「元号」や「西暦」をめぐる議論は、たしかに小さなものかもしれない。けれども社会における知識人の位置づけや、あるいは、文学や評論といったジャンルと、それを見つめる社会の共時的な変容を考察するにあたって、「卓抜な同時代人」という存在がいかなるものだったのかを象徴的に示す題材だと考えられる。「卓抜な同時代人」とは、もちろん、その時代を生きた人の中で抜きん出ている様子をあらわす。時代の空気を読む力に秀でた人物だ。桑原は、菊池暁が定義する歴史家というよりは、ジャーナリスティックな能力に長けた存在だった。その具体的なあらわれとして、「明治の再評価」を唱えた、その軌跡に本研究は着目している。学問とジャーナリズム、社会と知識人という、2つの相関性を如実に示す存在こそ、桑原にほかならない。それが、「卓抜な同時代人」という標語にあらわれているのではないか。この点については、本章末尾で再び触れる。

2-2. 明治の再評価

そのジャーナリスティックな桑原は、戦後において明治の再評価の先鞭をつけたのが、松田道雄と自分との対談だったと振り返っている（桑原 1988: 580）。論壇のみならず世の中の空気をつかみとり、議題設定をしたのは自分だと言う。その対談冒頭で、桑原は、父・隲蔵の周辺にいた「明治の老先生」の印象を回想する。

善悪の批判はあとからの問題にして、明治学者にはバックボーンが通っているということをお願いしますが、その他にあなたがおっしゃったとおり、よい意味での子供っぽさ、それとつらなるオプチミズムみたいなものがありますね。それは日本に明治になって新しい西洋の文化が入ってきた、日本はまだ未熟かもしれぬ、しかし、頑張ってやっておれば、三十年、五十年たてば追いつくだろう。場合によっては追い抜けるだろうという、そういう楽観的な考え方が明治の人にはあったと思うのです（桑原・松田 1955）。

この話を柳田国男にぶつけたところ、「君の説は大賛成ですといわれた」と明かす。柳田との会話は、「学問を支えるもの」と題して、この対談が掲載される直前に、雑誌『財政』に掲載されている。柳田は、次のように語ったという。

明治初期に生まれた学者は、忠義はともかく、孝行ということだけは疑わなかった。自分なども『孝経』は今でも暗誦できる。東京に出てきて勉強していても、故郷に学問成就を待ちわびている父母のことは夢にも忘れる事は出来なかった。人間には誰しもなま

け心があり、酒を飲みに行きたい、女と遊びたいという気も必ず起こるのだが、そのとき目頭に浮かぶのが自分の学費をつむぎ出そうとする老いたる母の糸車で、それは現実的な、生きた『もの』である。ところが私たち以後の人々は儒教を知的には理解していても、もはやそれを心そのものとはしていない。学問は何のためにするのか、××博士などは恐らく、真理のため、世界文化のため、あるいは国家のため、などと言うだろうが、それらは要するに『もの』ではなくて、宙にういた観念にすぎない。観念では学問的情熱を支えることが出来にくい。平穏無事な時勢は、それでも間に合うように見えるけれども、一たび嵐が吹きあれると、そんなハイカラな観念など吹き飛ばされてしまう。その上悪いことに日本人は自分の身のまわりの物を見て、そこから考える事を怠って、やたら本を読むくせがついた。本の中には真理が入れてあり、それを手でつかめば良いかのように。だから日本のことは、歴史のことも身のまわりのことも知らなくても、西洋の本に書いてあることを知っておれば結構学者としても通用するようになった。学者が弱々しい感じをあたえるというのはあたり前のことです（桑原 1969: 219）。

桑原は、「柳田先生が『孝行』という言葉で示したところのもの、学者の心情に深くかわかり、これを躍動せしめるものの衰弱ないし欠如は無視できない。（中略）心は『もの』によってしか動かず、心に支えられぬ頭脳の働きは弱いのである」（桑原 1969: 221）と断言する¹³⁾。

先に引用した松田道雄との対談に戻ろう。桑原が柳田に依拠して「明治の老先生」の「立派さ」を語る。その背景を「上からのナショナリズム」に求めた松田に対して、桑原は反論する。

明治の民衆は不幸であったというふうに今の人は決めて見がちですが（中略）、みんなが不平等で悲惨だと思えば、下の方からの立ち上がりもあっただろうし、それをふまえて、学者や芸術家の間に、それを反映した学問、芸術があつたに違いないと考えたい（桑原・松田 1955）。

肯定的な評価を下した上で、明治以後の西洋的なものの蓄積を活用しなければならないと説く。だから、桑原は、「明治の老学者」が支えにした「孝行」とは、まさしく民衆が生きた「もの」＝「母の糸車」であり、それは、抑圧に苦しむ惨めな姿の象徴ではなかった、と考える。より正確に言えば、「考えたい」という形で、そのように考えることを望んでいるのである。上記の引用に明らかなように、父親や柳田の背景に桑原が見ているのは、「伝統」という観念ではない。しかし、桑原自身は、京都学派の創始者を父として京都で育ったお坊ちゃんであり、「母の糸車」による支えとは無縁だった。だからこそ、明治の民衆が学問を支えるという物語に、桑原は希望を見出す。あるいは、見出そうと望んでいる。

この姿勢を、より明確に表したのが、昭和 31 年の元旦に発表された「明治の再評価」と題する文章だった。「独立への意志と近代化への意欲」と副題が付されたこの小論を桑原は、次のように書きおこす。

明治以後の日本近代文学は、いくたの優美ないし哀切な作品を生んだけれども、なぜ西洋や中国（たとえば鲁迅）におけるように、民族にとっての大きな問題を取り扱った社会性のある作品が出なかったのか。その理由を自由民権運動の挫折以後、軍国的絶対主義の圧力によって、作家が自由を失ってしまったからだと解するのが通説であり、私もそれを採用していたが、それに満足できなくなった次第は、昨年 1 月 1 日の「読書新聞」の松田道雄博士との対談で話した（桑原：1956）。

だから、桑原は、「民衆が抑圧されてきた、という説明には納得ができない」と述べる。そして、「明治の精神に殉死する」と記された夏目漱石の小説「こゝろ」が、新聞小説として、読者に素直に受け入れられた点¹⁴⁾をふまえて、「おくそく」を述べる。

もし革命前のロシアのように人民が悲惨で、インテリがすべて反政府的だったとしたら、日本の文学者もそうした読者に支えられて、きっと批判的な作品を書いただろうが日本の国民、つまり読者の大部分が明治に満足していたから、そういう作品が生まれなかったのだ、と、おくそくしてみたのである（桑原：1956）（原文ママ）。

抑圧と圧政に苦しみ、戦争に突入させられた惨めな国民、という一面的な見方に反旗を翻す。最後には、まだ戦争の記憶さめやらぬ中で、あえて、明治以後の日本の歴史を評価したい、と結ぶ。

明治以後の日本は、たしかに多くの欠点と矛盾をもっていたが、しかも明治の革命は巨視的にみて、ひとつの偉大な民族的達成であったと認めるのでなければ、私たちに希望はないのである。明治の人人の示した強固な独立への意志と大胆な近代化への意欲を、新しい進歩の立場から再評価することを今年への要請としたい（桑原：1956）

桑原がこの文章をしたためたのは昭和 30 年（1955 年）だ。この年は、のちに「55 年体制」と呼ばれる保守と革新それぞれの合同がなされ、12 月には「経済自主独立 5 カ年計画」が、政府によって打ち出されている。さらには、翌年に結実するソ連との国交回復交渉が盛んに報道されるなど、敗戦直後を意味する概念としての「戦後」から、人々は新しい時代への息吹を

感じ取りつつあった。

事実、桑原が上記の小論を書いた直後、作家の中野好夫は、雑誌『文藝春秋』2月号に「もはや戦後ではない」とする論考を発表した。この標語は、その5カ月後に公表される経済白書をきっかけに、流行語となったのはあまりにも有名な話だ。

さらに、実体経済の面から見ても、日本の歴史の始まりに位置する神武天皇から数えて初めての好景気を意味する「神武景気」に沸いていた。当時は、単なるゆるやかな好景気に過ぎなかったものの、この翌年・昭和32年（1957年）から、「神武以来」という表現が流行するほどの経済成長を遂げる。

単純に考えれば、「敗戦」というショックに打ちひしがれ、日本の歴史に誇りを持てなくなっていった人々が、過去に回帰する復古調に傾きはじめた、と言えるのかもしれない。そういった社会の空気を敏感に受け取った存在＝「卓抜な同時代人」として、知識人と社会との相関関係を見られるのかもしれない。

しかしながら、この桑原の文章に込められた意味を内在的に分析してみよう。

桑原は、「もはや『戦後』ではない」として過去を切り捨てるような「進歩の立場」ではなく、過去を振り返る態度を「新しい進歩の立場」として打ち出しているのである。それは単なる復古調ではない。「孝行」を支えにした「明治の老先生」の時代が過ぎ、「ハイカラな観念」に興じる「弱々しい感じをあたえる」学者ばかりになってしまった、と桑原は嘆く。かといって、いまさら「孝行」を復活させられない。このとき、「孝行」にかわるものとして、「明治の革命は巨視的にみて、ひとつの偉大な民族的達成であったと認める」ことを「学問を支えるもの」としてだけではなく、民衆を含めた日本を支えるものとして立ち上げようと桑原は試みる。そうでなければ、「私たちに希望はない」からだ。

小説「こゝろ」が発表された当時の「日本の国民、つまり読者の大部分は明治に満足していた」以上、「自由民権運動の挫折以後、軍国的絶対主義の圧力によって、作家が自由を失ってしまった」とは解釈できない。逆に、満足していた理由を、「明治の人人の示した強固な独立への意志と大胆な近代化への意欲」に見出す再評価が、自分たちを「支えるもの」と信じている。

2-3. 「卓抜な同時代人」

だから、桑原にとって、再評価の対象は、「1870年代」や「近代」という借り物の括りではなく、「明治」という日本語独自の記号でなければならなかった。こうした桑原の「元号」へのこだわりを示す文章が、この7年後（昭和37年）に書かれている。

「大正五十年」と題した文章で、桑原は、歴史家に「要望」を記している。

近代日本が明治維新を起点とすることは疑いないにしても、現代は明治と直結してはいない。昭和と明治の間には大正があるのだ。満州事変も太平洋戦争も、そして戦後の私たちの生活も、みな大正という基盤の上にそれに規制されつつ生じたといわねばならない。その意味で、戦後史もさることながら、日本の歴史家諸君が早く「大正史」をつくって下さることを要望したい（桑原 1980: 299）。

「明治の再評価」を唱えた同じ人物が、わずか7年後には、「現代は明治と直結してはいない」と述べる姿勢を、一貫性の欠如としてあげつらうこともできるかもしれない。けれども、ここでは、「近代日本」というロングスパンで捉えたところに着目したい。「戦後史もさることながら」という部分は、当時、歴史学者の遠山茂樹（遠山 1956: 19-28）らによって盛んに提唱されていた¹⁵⁾この記号への揶揄を含んだものだろう。桑原は、「戦後史」を「近代日本」から切断するのではなく、ひとつづきの歴史として掴もうとしている。

桑原は続けて、「明治の人々」が「世界情勢をかなりの的確にとらえていた」のに対して、「大正期の人々」が「外国の状況をリアリスチックに把握しえなくなった」と述べ、あらためて「明治」を讃える（桑原 1980: 312）。他方で、「お百姓がビールやサイダーをのみ出した」点を例に「文化のあらゆる分野において、今日のパターンは好悪は別として大よそ大正期に生まれた」と評価し、「大正史」作成への要望をあらためて表明したところで、文章を結ぶ（桑原 1980: 322）。

この時期を「1920年代」と括ることで見えるものもあるかもしれない¹⁶⁾。ただ、桑原の目には、あくまでも「大正史」という時代区分によってこそ、「大正という基盤」が浮かびあがる。「もはや『戦後』ではない」、あるいは、「戦後史」という形で「戦後」は像を結びつつあった。その状況に対して、「昭和と明治の間には大正がある」として、あえて、その「元号」に意味を付与させた。ここに、「明治の再評価」を唱えた精神との共通項を見出せる。

自分たちを支えている「もの」とは、明治以後、営々と積み上げてきた時間としての歴史であり、「元号」という日本語で表現される時空間だ。「戦後」という人為的な区分よりも、「大正という基盤の上に」、先の戦争があり、その後の生活がある。

桑原武夫という影響力をもった知識人が「明治」の再評価を提唱したから、一般に広まったという一方的な関係だけではない。当時の知識人と社会との関係を見れば、桑原武夫は、「明治」だけではなく、戦後の人々が、「神武景気」という形で、「元号」を積極的に標榜する世の中の雰囲気や敏感に反応した結果として、上記のような小論を数多くあらわした。ここにこそ、知識人と社会との相互性を確認できる。「明治の再評価」を唱え、「大正五十年」という時間感覚を打ち出したのは、桑原自身が、「元号」という記号に拘束されていたあらわれだ。自分たちの基底に流れるものとして、「元号」による想起の話法を選択したのである。だからこそ、

映画「明治天皇と日露大戦争」について「復古性をなげくよりも、進歩的にして民族の誇りを高めうる映画の主題として何がありうるかを、私たちは本気で考えねばなるまい」（桑原 1957: 190-193）と説く。

この点で、「卓抜な同時代人」¹⁷⁾ という位置づけは、まさに桑原を的確に表現しているのみならず、当時の社会風土を顕現していると言える。それこそが、本研究における知識社会学的な考察のひとつめの観察結果なのである。

桑原は、この後、1975 年になると、「元号法」をめぐる論争の中で、「元号は国際的ではない」という理由をもって、その制定に反対し、元号の廃止を訴えた（桑原 1975）。そこにもまた、彼の時代の空気を鋭敏に掬いあげるジャーナリスティックなセンスが光っている。1975 年に至る戦後 30 年という時間は、社会が「元号」へのこだわりを捨てるのに十分な歳月だった。桑原は、この変化に敏感に反応したからこそ元号の廃止を訴えた。「明治の再評価」や「大正史」を要望していた同じ人物が、である。「明治の再評価」を唱えながらも、「孝行」や「大胆な近代化への意志」といった抽象的な表現に留まり、たとえば、明治維新の歴史考証に携わるといった具体的な作業には着手しない。「大正史」についても、「歴史家諸君」に「要望」するばかりだ。外野からコンセプトだけを提出する姿勢は、歴史家のものではない。

ゆえに、没後、桑原武夫は、その業績をほとんど振り返られないまま、名前だけが学芸賞に残るという奇妙な継承をされた。時代を映す鏡のような存在、つまり、知識人が社会に影響を及ぼし、また、社会もまた知識人に反応する、相関性と双方向性を持った関係を結んでいた時代の象徴として、桑原武夫は思い出される。だから桑原武夫学芸賞の創設意図に、「卓抜な同時代人」と挙げられていたのである。彼は、時代を読む能力に長けた存在、その時代を生きた人＝同時代人の中で、その時代の空気を読む力において他より抜きん出た＝卓抜な存在だった。

そして、桑原のこうした存在のあり方は、もうひとりの知識人＝竹内好に大きな影響を与える。「明治の再評価」に端を発する「明治百年祭」の提唱だけではない。桑原が、知識人と社会の双方向性を体現していたとすれば、竹内は、それと同時に、学問とジャーナリズムの結節点に位置する存在でもあった。その意味で、本研究が進めている知識社会学的考察の最適な対象なのである。

次章では、桑原の「明治の再評価」に影響を受けながら、他方で、復古調に反対するという苦しい立場を取らざるを得なかった中国文学者・竹内好を通じて、「明治」という「元号」が象徴していた当時の社会状況、あるいは逆に、社会の状況を表す記号としての「明治」を見ていこう。

3. 竹内好における「明治」と「戦後」

3-1. 桑原からの影響

本章で詳しく述べるように、竹内が「明治百年祭」を提唱するのは、桑原武夫による「明治の再評価」を受けたものであった。竹内のことばを借りれば、「私の提唱はほとんど桑原説を祖述したに過ぎない」（竹内好 1981b: 236-238）。もちろん、知識人のことばは、社会に向けたパフォーマンスでもあるため、額面通りに受け取るだけでは理解が浅くなるかもしれない。けれども、前章で見たように、桑原は、当時の空気を鋭敏に嗅ぎ取る「卓抜な同時代人」であったからこそ、学問とジャーナリズムが交わる地点にいる竹内好にも影響を与えたのである。つまり、学問もまた、社会やジャーナリズムに影響を与え、そして与えられる、そんな社会的な構図の中にいた知識人として、「明治百年祭」を竹内は唱えたのである。

桑原と竹内は、だから、単なることばの上での影響関係ゆえに興味深いだけではない。当時の知識人全般の位置づけを知識社会学的に考察するのにうってつけな影響関係なのである。

ここでも教科書的に振り返っておけば、明治43年（1910年）に長野県南佐久郡臼田村に生まれ、東京に移住の後、府立一中、大阪高等学校を経て、東京帝国大学支那学科に入学。同期に作家の武田泰淳がおり、応召ののち、戦後は、中国の作家・魯迅の翻訳を進める。また、1957年ごろから、日米安全保障条約反対運動をすすめる、1960年5月には強行採決に抗議して、当時の勤務先・東京都立大学を辞職する。その後は、在野の評論家・文学者として活躍し、1977年に食道癌のため死去した。

竹内の従軍体験は日米安保への強硬な反対姿勢の形成に影響を与えた、と多くの論者が見なしている（松本 2000）、（岡山 2002）、（孫 2005）。本研究は、先行研究に見られる、そうした竹内好個人における思想の変遷に注目するのではなく、桑原武夫との対比・影響関係を通して、当時の知識人と社会との関係を論じる。だから確認しておかなければならないのは、「明治」という「元号」にまつわるものや、それに付随するイメージ、および、「明治から百年」といった、抽象的な概念としての「明治」を扱っている、という点である。竹内もまた、桑原武夫と同様に、歴史家としての仕事よりも、問題を提起した評論家として取り上げることに意味があるとする立場をとっている。

桑原の影響を受ける形で明治維新後百年祭を竹内は提唱する。その影響に竹内は自ら苦しむのである。このいかにも竹内らしい足跡を観察することによって、「元号」への無意識の拘束と、それへの抗い方をみていこう。

3-2. 「明治維新百年祭」の提唱

「60年安保」の3カ月前の2月、『週刊読書人』に「『民族的なもの』と思想——60年代の

課題と私の希望——」という短い文章を寄せている。

正月のジャーナリズムは「黄金の 60 年代」のにぎやかなかけ声で幕をあけた。宇宙時代と、東西の雪どけがたたえられた。このカンパニアのおかげで昭和の年号の影がうすくなったのは結構なことである。「昭和」が「皇紀」の後を追う日はいつか来るだろう。その予兆が見えたのはめでたい。十年区切りで未来をうらなう行事は、日本のジャーナリズムの歴史ではじめての例ではないかと思う。(中略) 十年先がうらなえるというのは、よくもわるくも、現状が安定しているからだろう (竹内好 1981a: 59)。

そして、日本におけるナショナリズムをめぐる議論について概観する。つづけて、『明治国家の歴史のなかには、現在の日中関係を正しいものにかえるような、思想的遺産というものがないのではないか』もしあれば示せ」という医師・松田道雄からの問い掛けへの回答を留保する。その上で、少し唐突とも思える形で、次のように提案する。

そこで私は一つの提案をしたい。1968 年を目ざして、論壇が共通の課題を設定すること、その課題は、明治維新百年を祝うべきであるか祝うべきでないか、祝うとすればどういう形で祝うべきか、ということである (竹内好 1981a: 62)。

自身の希望としては、この明治維新百年祭を「黄金の 60 年代」の一代行事にすることによって、「日米修好百年祭の史的事実のあやまり、史的感觉のズレを是正」し、「紀元節への郷愁もこのカンパニアの中に融け込ませたい」と希望したのち、末尾で「この提案が受け入れられたと仮定した場合、カンパニアの推進がかりとして私は桑原武夫に一票を投ずる」(竹内好 1981a: 63) と結んでいる。

「昭和の年号の影がうすくなったのは結構なこと」と捉える竹内は、「元号」ではなく「西暦」での表記にこだわる。だから「黄金の 60 年代」や「1968 年」と書かなければならない。にもかかわらず、「明治維新百年を祝うべきであるか祝うべきでないか」を論壇の共通の課題として提案する。

提案翌年の秋、竹内が常連の執筆者のひとりだった雑誌『思想の科学』は、昭和 36 年 (1961 年) 11 月号で、「明治維新の再検討」という特集を組んでいる。竹内は、そこに「明治維新百年祭・感想と提案」と題した文章を寄せ、「明治維新百年祭を祝うべきか祝うべきではないか」という自ら設定した課題に答えている。「論壇に共通の思想課題を設定しなかった」ことを提案の動機とした上で、「私の提唱はほとんど桑原説を祖述したに過ぎない」と竹内は弁明する。そして、「フランス革命後のナポレオン体制が、プロシアを経過して日本へ輸入さ

れ、明治国家を形成し、それがその後の AA ナショナリズムのモデルになった、というのが桑原武夫の近代史観」だと定義し、これを「共通の討論の材料にすることから出発したらどうだろう」と新たな提案をしている（竹内好 1981b: 236-238）。

このように桑原を引き継いでいる竹内は、当初の驚きを振り返る。提案の元になった「明治の再評価」について、桑原と同席した座談会において、次のように述べる。

あれは元日の新聞に出たんですね。私にはかなりショックでした。「第二芸術論」などから考えて、桑原さんという人はそういうことを書かれまいと想像していたんですよ。ちょっと意外だったわけです（松島・桑原・竹内・羽仁 1962: 178）

その上で、自らの関心のありかを、次のように補う。

明治維新をいまなぜ取り上げるかということ、明治維新が終わっていないという前提がある。もう解決したというなら、歴史家に任せてわれわれはやる必要はないけれども、明治維新はつづいている、まだ結果が出ていない。そうすると、一回がつづいているわけだから、将来に有効性を期待することもできるのではないですか（松島・桑原・竹内・羽仁 1962: 188）

竹内は、桑原と同様、自らを歴史家ではないと位置づける。史実に基づいた論争に加わるよりも、評論家の立場をとる。自分たちが、いまなお、明治維新の影響の下にいる、という点で、桑原武夫の見解を受け継いでいる。さらに、「元号」という日本語の時空間による拘束に自覚的であった。

雑誌『中央公論』は、この座談会を第1回とした「明治維新の再評価」と題する長期連載を掲載している。竹内の見通しとは裏腹に、2年間続いた連載に執筆した30人のうち28人が歴史学の研究者であり、わずかに評論家の河上徹太郎と小説家の南條範夫が加わったに過ぎない。あくまでも歴史家の論争として、すなわち、あたかも「もう解決した」といわんばかりの視点から論じられていたのである。さらに、竹内の意図をさらに裏切るように、「明治維新の再評価」の枠内で作家・林房雄による「大東亜戦争肯定論」が掲載され、大きな反響を呼ぶことになる。

3-3. 苦悩する知識人

こうして自らが火付け役となった論争の発展に、竹内は戸惑う。「明治ブーム」に思う」として昭和40年（1965年）5月、東京新聞に掲載された小さな論考にその戸惑いがあらわれて

いる。これは、「明治百年か戦後二十年か」という論争を受けて、東京新聞が、竹内に依頼したものだ。

この論争は、もともと当時ベストセラーになっていた評論家・山田宗睦による保守系知識人批判書・『危険な思想家 戦後民主主義を否定する人びと』に便乗したものだった。山田は、同書の「まえがき」で次のような啖呵を切っている。

わたしは“戦後”にすべてを賭けている。この本は、戦後を擁護するとともに戦後を殺そうとするものたちを告発した書物である。(中略) 3年後の1968年は、明治維新百周年にあたる。このチャンスをめざして、いろいろの戦後否定の声が一つに合わされようとしている。維新百年が勝つか、戦後二十年が勝つか。それはじつに日本の将来がかかっている(山田 1965:3)。

何とも物騒な物言いだが、ここにも当時の知識人と社会との相互作用がある。山田のことは、社会が望んでいたからこそ紡ぎ出され、そして支持を集めた。山田の啖呵と並行して、つまり、知識人と社会、あるいは、学問とジャーナリズムの関係をあわらすように『朝日新聞』は、「明治百年と戦後二十年」と題して同年4月5日から22日まで断続的に8人の文化人に寄稿を求める。その冒頭には、次のような意図が書かれている。

日本の現代を、明治いらい百年の連続と見るか、あの敗戦によって再び書直された歴史の一時点とみるか、いわば戦後史の新しい意味づけをめぐってここ数年来、多くの人たちによる問題提起が行われている(朝日新聞社 1965)

竹内は、こうした一連の動きに対して、『東京新聞』の紙面を借りて釈明する。「文壇にも論壇にも遠ざかっているので、はじめ発言する気はなかった」が、「自分の関係した部分は、釈明する必要があると感じた」(竹内好 1981c: 239)というのである。そして、山田の挑発について「私はドキリとした。じつは『明治維新百年祭』ということを出した当事者の少なくともひとりとは私だからである」(竹内好 1981c: 241)と振り返る。すなわち山田は自分を告発すべきだったにもかかわらず、そうしなかった。その理由を、「山田なりの計算があった」と推測してみせる。その計算とは、「失われつつある『戦後』を奪回すべく、(中略)ちかごろの明治ブームの風潮を敵に見立てることによって、新しい酒袋を用意した」(竹内好 1981c: 241)ものだとする。

竹内は、あらためて自らの「明治維新百年祭」提案意図を、ナショナリズムとの関連で明らかにする。

私は、戦後わりに早くから「ナショナリズム」をいい出した人間だ。もっとも後になるほど「ナショナリズム」という規定のし方が気になって、「ネーションの形成」といういい方に変えるようになったが。そういう私にとって、明治ナショナリズムの究明は欠かせない課題だ。私は次第に、明治ナショナリズムは「国家あってネーションなし」、つまりネーション形成失敗例と考えるようになった。したがって維新にさかのぼっての可能性の探求に目が向くようになったのは私にとって自然だった（竹内好 1981c: 242）。

その上で、最後に、「歴史は書きかえられる、という考え方」に基づけば、「戦後」も「明治」も不確定であるから、『明治』によって専制と侵略を代表させ、『戦後』によって平和と民主主義を代表させる山田の規定のし方には賛成できない」（竹内好 1981c: 244）。これが竹内の本心なのである。

竹内の文章に込められた意味に内在するとき、事態はより明白になる。

竹内は結論を出していない。否、出せない。それは、竹内の言い方によれば「論壇の共通課題の設定が目標」であり「歴史は書きかえられる」からなのだ。しかし、「明治ナショナリズム」を「ネーション形成失敗例」と捉える立場からは、「昭和の影がうすくなったのは結構なこと」という評価と、「紀元節への郷愁もこのカンパニアに融け込ませたい」という結論が導かれる。

桑原武夫とは逆に、明治を否定的な形で振り返ろうとしながらも、あくまでも「歴史は書きかえられる」というニュートラルな位置に身を置こうとする。欺瞞と断罪するのはあまりにも容易いが、ここにあるのは、「明治維新」を、現在の自分たちを規定するものとして捉えながら、その呪縛を相対化しようともがき苦悩するひとりの男の姿ではないか。

昭和 23 年に発表した「中国の近代と日本の近代」（竹内好 1980a）は、その 16 年後に雑誌『中央公論』が「戦後日本を創った代表論文」として取り上げるほど名高い文章である。しかし、その知名度にそぐわないほどの激しい調子で竹内は述べる。

すべては明治維新革命に規定された進歩の方向に問題がある。明治維新を成功させた日本文化の優秀さが問題だ。日本の指導者たちは優秀であった。かれらの進歩主義は強く、反動は相対的に弱かった。唯一の危機である明治十年を見事に乗り越えることによって、日本の進歩主義は、完全に反動の根を絶った。しかし、それといっしょに革命そのものの根も絶った（竹内好 1980a: 166-167）。

明治維新を「革命」と呼びながら、その進歩の方向に問題があると断じる。けれども、「絶たれた革命そのものの根」について、この論文では詳らかではない。しかし、雑誌『思想の科

学』の執筆者を中心に行われた「共同研究 明治維新」において、竹内は、中国革命との比較において、次のように分析する。

孫文は、日本の官製学者によって矮小化された維新観にのってこの発言をしているのではない。むしろ純化され理想型として、現在形での維新を語っているのだ。そしてそれを語ることによって、維新の精神を没却した現代日本をひそかに憐れんでいるのである。純化された維新精神とは何か。むろん、それは帝国主義の対極に立つものである。孫文によれば、帝国主義は本来ヨーロッパの属性である。一時は帝国主義の虜となろうとも、維新の精神が健在ならば、かならず復元作用が期待される。強権に対する公理が、中国革命の精神であると同時に明治維新の精神であるべきだ（竹内好 1980b: 180）。

権力に対して反動する動きこそが、革命の根であり、明治維新の精神だと強調する。だから、竹内は、明治時代の指導者たちを優秀だと認めつつ、手放しで評価するわけではない。その時代の民衆が持っていながら、弾圧されてしまった反動の精神を、「明治百年」に際して、再び持ち上げたいことを望んだ。その姿は、日米安保の強行採決に抗議して職を辞した時と同一線上にある。他方で、「明治百年」に関して、自分たちの存在を拘束する精神として、決して逃れられないものだと思えてもいる。だから、桑原の「明治の再評価」にショックを受けながらも、その桑原説をそのまま祖述したに過ぎないほど、考え方を受け入れている。

いっぽうにおいては、反動の根を絶った明治の指導者だけではなく、維新の精神を没却した現代日本をも否定する。もういっぽうにおいては、その否定されるべき歴史こそが、自分たちの基盤をつくりあげているとも考える。矛盾に引き裂かれないために、「歴史は書きかえられる」という構築主義的とも言える立場を選択することで、さらに苦悩する。だから、竹内の苦悩は、問題としての輝きを失わないまま、現代にまで引き継がれ、その答えが出ない問いに、数多くの論者が魅了される。

この苦悩とは、すなわち、「明治百年」を否定的に回顧しようとしつつ、「歴史は書きかえられる」と主張する姿である。否認すべき「明治維新」は、同時に、いまここにいる自分の基盤にほかならない。それゆえ、竹内は、その2つの矛盾する思考のあいだで苦悩する以外にない。

4. 結論と今後の課題

本研究は、主として雑誌や新聞における桑原と竹内のことばを知識社会学的に扱ってきた。それは、ジャーナリズムにおける「明治百年」の思想と、現実の社会との双方向的な関係をとらえようとしたためであった。既に指摘したように、この2人のことばは、互いの専門領域で

ある文学のみならず、歴史学からも注目を集めていた。さらに、竹内自身も、『近代日本思想史講座』の編集責任者たちによる共同討議をまとめ、思想の内部構造を解析している。すなわち、文学、歴史、思想、という学問の世界から注視されるだけでなく、彼ら自身もまた執筆者として活躍していたのであり、そこにこそ、往時のジャーナリズムと学問の関係が如実にあらわれている。さらに、本研究で扱った「明治百年」という歴史意識は、「専門家」だけに論じる資格があるわけではない。それどころか、雑誌『思想の科学』の執筆者を中心に行われた「共同研究 明治維新」に象徴されるように、学者に限らないさまざまな立場の論者が集うスタイルこそ、当時の歴史意識を論じるにふさわしかったのである。ゆえに総合雑誌や新聞の文章だけではなく、そうしたさまざまな文章を取り上げて内在的分析を行った。

桑原による「明治の再評価」の提唱を端緒とし、竹内による「明治維新百年祭」に発展する一連のことは、社会だけではなく日本政府も巻き込んだ国民的行事として結実した。本論文第1章で、竹内が唱えた「未発の思想」ということばを引用した。それは、体系的には未完成でありながら、社会的には圧倒的な訴求力を持ったものであった。桑原と竹内のことは、まさしくこの定義に当てはまる。

桑原武夫は、時代の空気をすくいあげるジャーナリスティックな文章を次々に書き続けた。竹内好は、時代の寵児であるとともに、その苦悩する姿勢や、矛盾した態度そのものが、時代の空気を象徴していた。竹内が渦中にいた「明治百年」か「戦後二十年」かという問いは、彼の分裂の最たるものであった。

原則を言えば学問は純粋に真理を追求すればよく、大衆からの支持は要らない。昨今でこそ社会的有用性が求められるものの、桑原武夫が活躍したときにはそうではなかった。桑原は「学問を支えるもの」として、「明治の革命は巨視的にみて、ひとつの偉大な民族的達成であったと認める」ことを挙げた。そこには、近視眼に基づく利益や利潤追求とは正反対の、民衆が学問を支えた古きよき伝統を引き継ごうとする強い意志が読み取れる。だからこそあえて、桑原は「卓抜な同時代人」として「明治の再評価」を打ち出し、学者としてよりもジャーナリストのように振る舞い、社会の空気を読み取り、さまざまな文章をものし、発言を世に問うた。この点に、知識人と社会との相関性が読みとれる。

そして竹内は、桑原に強い影響を受けていた。それは既に述べた通り、竹内の言動からも、さらには、歴史学からの言及によっても明らかだ。竹内は、あくまでも真理を追い求める学問に希望を託したからこそ、数々の「講座」や「共同研究」に踏み出し、普遍的な知のありかたに寄り添おうとした。しかしながら、明治期の民衆が持っていた、権力に対して反動する動きを「明治維新の精神」ととらえる竹内は、社会からの支持を必要としたし、また同時に、社会も竹内を求めた。それは、決して一方通行ではなく、双方向的なかかわりだった。竹内は、学問とジャーナリズムの結節点に身を置いていたからこそ苦悩したのである。否定されるべき明

治期以来の権力者たちの歴史が、同時に現在の自分たちの基盤ともなっているために肯定せざるを得ない。矛盾に苦しむ竹内は、「歴史は書きかえられる」とする立場に依り、さらに苦悩する。その苦悩はまさしく、学問とジャーナリズムが、つまり、真理と民衆からの支持が、しばしば齟齬をきたす地点での苦しみと悩みだった。

「明治百年」が、この2人の知識人によって提唱され、論じられたことそれ自体が、当時の知識人と社会の、そして、学問とジャーナリズムの相関性・双方向的影響の顕現にほかならない。

こうした社会的構図を踏まえうえて、「明治百年」とはいったいどのような時空間だったのか。その具体的な分析が次なる課題として残されている。

注

- 1) なお、竹内洋は、同書で前掲の『危険な思想家』について、「左右の激しい潮流をいったいどう理解してよいだろうかという気持ちの整理になるかもしれないと思ひ手にしたが、当時のベストセラーであるカップ・ブックスだけに、保守派知識人のスキャンダルを盛り込んだ軽い読み物のように思ったことも購入の少なからざる動機だった」（竹内洋 2011: 324）と回想し、『『危険な思想家』の中身よりも、『危険な思想家』という告発本の刊行それ自体が事件である」（竹内洋 2011: 326）（下線原文）と振り返っている。
- 2) あらためて断るまでもなく、昭和36年=1961年に『中央公論』で連載がはじまった「大東亜戦争肯定論」の著者として名高く、そして、逆に、それゆえに悪名高い存在でもある林房雄の歴史意識をめぐっては、以下に簡単な指摘をするにとどまる。

それは、すでに、「明治百年」か「戦後二十年」か、という問いの磁場で、もがいていた桑原武夫と竹内好とは異なり、彼の歴史意識は、次の言葉に端的にあらわれているからにほかならない。

私は明治百年も戦後二十年も、西洋文明の挑戦に対する日本文明の抵抗と応戦だと見る。両者のあいだに本質的な差異はない（林房雄 1965）

すなわち、そこには、「明治」か「戦後」か、という問いはない。だからこそ、大東亜戦争は肯定されなければならないのだし、その著書をめぐって、大がかりな論争が生じた、という事実それ自体が、当時の日本語の時空間に暗黙のうちに漂っていた、「西洋文明に対する日本文明の抵抗と応戦」という意識を、あからさまに表明した機制を如実に物語る。もちろん、それは、単純で悪質なナショナリズムだと批判することもできるかもしれないが、しかし、たとえば、林の守護神とも言うべき存在だった、三島由紀夫が、林に宛て葉書の中で述べている次の言葉が、おそらくは、もっとも簡潔に、往時の反応を示している。

行文の裏に詩が感じられ、熱血が感じられる史書というものを、最近私は他に読んだことがございません。この御本は本当に生きものとしての日本及び日本人をとらえている

と思います。言葉を尽くせませぬが、読後の昂奮を一言お伝え申し上げたく（三島 2004: 794）

「生きものとしての日本及び日本人」の意識には、「明治」という過去や、「戦後」という現在をとらえるよりも、もっと即物的に、「西洋文明の挑戦に対する日本文明の抵抗と応戦」に、身体的に反応したのではなかったか。もっとも研ぎすまされた感覚を持つ同時代人・三島は、鋭く、その事実を指摘している。否、指摘するなどといった冷静な評論家面をしているのではない。三島もまた、身体的に、「熱血」を感じているのだ。

これこそが、竹内洋が指摘した「悔恨共同体」の教祖たる林房雄が、同時代的に抱いていた、「明治百年」でも「戦後二十年」でもない、「熱血が感じられる」歴史意識にほかならない。

そのことを確かめられさえすれば、桑原武夫と竹内好における苦悶は、あっさりと相対化できるのではないか。そして、それこそが、竹内好が体現していた、苦悶や矛盾といった、知的階層における小難しい歴史意識や時代区分の作法とはまた別の、「生きものとしての日本及び日本人」の顕現にほかならなかった。だから、いまでも、林房雄は、その『大東亜戦争肯定論』という、見方によっては物騒な書名によって、アドホックに呼び出される。そこに理由などない。「熱血」がほとばしる、その情念によって、林房雄はいまなお、ゾンビのように何度も生まれ変わる。

こうした「生きものとしての日本及び日本人」の時代区分の作法を観察したことで、本節の知見はより鮮明になる。すなわち、「昭和」と「明治」に加えて、復興と成長の道のりを象徴する「戦後」という時代区分が混在するに至る過程においては、桑原や竹内のようなしかめ面の議論と同時に、林房雄の「熱血」もまた混在していたのである。

- 3) 1998年に創設されたが、2012年の第15回をもって、選考委員の高齢化などを理由に終了した。
- 4) 2000年以降だけで見ても、「竹内好」をタイトルに含む文献は84件あるものの、「桑原武夫学芸賞」を除いた文献は、5件にとどまる（CiNiiでの最終アクセス2014年6月2日）。
- 5) 実感レベルでも、竹内好自身の文章は丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクション』1・2（日本経済評論社、2006年）や『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993年）、あるいは、鲁迅の翻訳書が大型書店には並んでいる。林房雄も、『神武天皇実在論』（学研M文庫、2009年）が再刊されたほか、『大東亜戦争肯定論』は2006年に夏目書房が普及版を出している。いっぽうで、桑原武夫は、生前に朝日新聞社から、没後に岩波書店から、と、全集が2度も出版されている。にもかかわらず、現在では、岩波新書の『文学入門』（1963年）が辛うじて手に入るかどうか、といった具合であり、翻訳書（ジュール・ミシュレ『フランス革命史』上・下（中公文庫、2006年）など）に名を残すのみとなっている。
- 6) 菊地暁「連載企画 人文研探検隊——新京都学派の履歴書（プロフィール）」
第3回 桑原武夫の何がそんなに偉いのか？」慶応義塾大学出版会ホームページ、
<http://www.keio-up.co.jp/kup/sp/jinbunken/0003.html>（最終アクセス2014年5月11日）
- 7) もちろん、菊地が取り上げる梅棹忠夫・司馬遼太郎編『桑原武夫伝習録』（潮出版社、1981年）や（多田 1959）をはじめ、桑原と親交があった論者による回想文集の類は多いが、近年では、（根津 2006）を例外的な試みとして挙げるに留まる。また、本稿初稿提出後に出版された（鶴見 2013）では、桑原における会話の重要性に着目している。
- 8) 2000年以降に出版されたものに限っても、（松本 2000）、（岡山 2002）、（孫 2005）をはじめ、8点にのぼる。
- 9) 荻部直は、2013年に公刊された座談会の中で、次のように述べている。

竹内好は、現代中国とか毛沢東とかいっても、思想の原点はやっぱり魯迅なんですね。武田泰淳の『風媒花』の中には、竹内好をモデルにした人物が、いつも「ロジンは『ロジンは』」と言及しながら断定口調で厳しいことを言っている。つまり竹内の中国も、丸山の西洋近代と同じような、現実を批判するための立脚点で、それを象徴するのが魯迅という文学者だった。ただそれが、戦後初期の現実の中で、中国革命の評判がよくなっていくのに、表面上符合してしまった。竹内本人がそれを利用した面もあったでしょう。毛沢東主義者のように誤解されてしまうのも、本人がそれと呼びこんでしまったところがある。四人組批判のあとのように中国共産党の評判が悪くなった時代に、原点としての魯迅を語っていたのなら、格好いいと思いますけど（荏部・高澤・奥泉・桂 2013: 25-26）

- 10) いわゆる「社会学」的な議論では、たとえば、長谷正人が、近代社会が取り憑かれている「主体」の病理を、とりわけ西洋近代」への「遅れ」という視点で捉えた上で、竹内好の「方法として」のアジアに抵抗の可能性を見出している（長谷 1993）が、本節の議論とは異なる。
- 11) 菊地暁は、上記「注6」で挙げた文章の冒頭で「京大人文研のお家芸「共同研究」の立役者であったことはもちろん、生涯にわたってクリティカルな論説を発表し続けた言論界の寵児であり、また、国語審議会委員、日本学術会議会員、日本芸術院会員など数々の要職を担う学界の重鎮でもあった」とまとめている（菊地、前掲）。
- 12) 桑原武夫学芸賞ホームページ <http://www.usio.co.jp/html/kuwabaratakeo/gaiyou.html>（最終アクセス 2014 年 5 月 11 日）
- 13) 柳田と桑原の議論は、典型的な「解体論」であり、この「明治の学者は強く、それ以後の学者は弱い」という見え方自体が、知識社会学的な対象となるのだが、その点については、別論を期す。
- 14) この「明治の精神」および、夏目漱石『こゝろ』の評価が、「戦後」におけるものである点については、すでに別稿を準備しているが、本論文では紙幅の都合上、結論のみを述べるにとどまる。
- 15) 「戦後史文献解題 1-3」『レファレンス』100～102, 1959 年, 国立国会図書館調査及び立法考査局,
- 16) たとえば、(海野 1985) などに顕著のように、「モダン」を主題として論じる方法を参照。
- 17) 桑原武夫学芸賞ホームページ
<http://www.usio.co.jp/html/kuwabaratakeo/gaiyou.html>（最終アクセス 2014 年 5 月 11 日）

参考文献

- 池田啓悟 2011「〈中絶〉される論争：「愛情の問題」をめぐる林房雄と宮本百合子」『立命館文学』（621）立命館大学文学部
- 海野 弘 1985『モダン都市周遊：日本の 20 年代を訪ねて』中央公論社
- 岡山麻子 2002『竹内好の文学精神』論創社
- 小熊英二 2002『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社
- 小野俊太郎 2012『明治百年 もうひとつの 1968』青草書房
- 荏部 直・高澤秀次・奥泉 光・桂 秀実 2013「座談会 3・11 後から見た戦後思想」『述』6 号, 近畿大学国際人文科学研究所編, 論創社

菊地 暁「連載企画 人文研探検隊 —— 新京都学派の履歴書（プロフィール）」

<http://www.keio-up.co.jp/kup/sp/jinbunken/> 最終アクセス 2014 年 5 月 11 日

桑原武夫 1956「明治の再評価」『朝日新聞』1956 年 1 月 1 日 7 面

—— 1957「拙劣映画と芸術外的大感動」『世界』（1957 年 7 月号）

—— 1969「学問を支えるもの」『財政』（1954 年 11 月号）→『桑原武夫全集』（第 5 巻）朝日新聞社

—— 1975「元号について」『世界』（1975 年 8 月号）岩波書店

—— 1980「大正五十年」『文藝春秋』（1962 年 2 月号）→『桑原武夫集』（第 6 巻）岩波書店

桑原武夫・松田道雄 1955「新春対談 日本文化への発信」『日本読書新聞』（1955 年 1 月 1 日号）

桑原武夫・松本清張 1968「明治は日本のルネッサンス」『文藝春秋』（1968 年 11 月号）

国立国会図書館調査及び立法考査局 1959「戦後史文献解題 1-3」『レファレンス』100～102

佐藤美奈子 2006「「アジア」を語るということ —— 1980 年代以降の竹内好論 ——」『社会科学研究』（58-1）東京大学社会科学研究所

代田智明 2009「竹内好『近代とは何か』『近代の超克』再読」『中国研究月報』（63-7）社団法人中国研究所

(社)現代風俗研究会 いつも会いたい桑原先生プロジェクト班・編『いつも会いたい桑原先生』

孫歌 2005『竹内好という問い』岩波書店

高橋 徹 1987『近代日本の社会意識』勁草書房

竹内 洋 2011『革新幻想の戦後史』中央公論社

—— 2012『メディアと知識人 清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社

竹内 好 1959「講座をはじめに当って」『近代日本思想史講座』Ⅰ、筑摩書房

—— 1980a「中国の近代と日本の近代 —— 鲁迅を手がかりとして ——」『東洋文化講座』（第三巻）東京大学東洋文化研究所（編）白日書院、1948 年）。→「近代とは何か（日本と中国の場合）」として、『竹内好全集』（第 4 巻）筑摩書房

—— 1980b「明治維新と中国革命」1967 年 11 月『共同研究 明治維新』→『竹内好』全集 4 巻 筑摩書房

—— 1981a「「民族的なもの」と思想 —— 60 年代の課題と私の希望」『週刊読書人』（1960 年 2 月 15 日号）→『竹内好全集』（第 9 巻）筑摩書房

—— 1981b「明治維新百年祭・感想と提案」『思想の科学』（1961 年 11 月号）→『竹内好全集』（第 8 巻）筑摩書房

—— 1981c「「明治ブーム」に思う」東京新聞 1965 年 5 月 17 日、18 日→『竹内好全集』（第 8 巻）筑摩書房

多田道太郎 1959 多田道太郎 1959「桑原武夫論」『新選現代日本文学全集 第 34（渡辺一夫、竹山道雄、桑原武夫、加藤周一集）』筑摩書房

坪内祐三 1997「戦後論壇の巨人たち 第 17 回 桑原武夫 モラリストの二重性」『諸君！』（1997 年 11 月号）

—— 2009「祝祭か戦前回帰か」毎日新聞社編『1968 年に日本と世界で起こったこと』毎日新聞社

鶴見俊輔 1991『鶴見俊輔集 4 転向研究』筑摩書房

鶴見太郎 2013『座談の思想』新潮選書

遠山茂樹 1956「戦後史をどう受けるか」『世界』（1956 年 8 月号）岩波書店

内藤由直 2009「林房雄『青年』における本文異同の戦略 —— 国民文学への道」『日本近代文学』

(80)

- 永原慶二・藤井松一・板垣祐三・荒井信一 1968「『明治百年祭』をめぐって」『歴史学研究』1968年2月号
- 新倉貴仁 2008「存在拘束性のナショナリズム —— 丸山眞男と知識社会学」『相關社会科学』(18) 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻
- 根津朝彦 2006「桑原武夫の傘の下で」思想の科学研究会(編)『「思想の科学」50年の回想 —— 地域と経験をつなぐ ——』出版ニュース社
- 長谷正人 1993「「主体」のパラドックスと「遅れ」の意識」『ソシオロジ』(37-3) 社会学研究会
- 浜日出夫 2012「知識社会学」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂
- 林 淑美 「林房雄」 国史大辞典 オンライン・データベース Japan Knowledge+(最終アクセス 2014年5月10日)
- 林 房雄 1965「精神の支柱こそ必要 両者に本質的な差異はない」『朝日新聞』1965年4月21日, 東京本社夕刊5面
- 松島栄一, 桑原武夫, 竹内 好, 羽仁五郎 1962「明治維新の意味【討議】」『中央公論』(1962年1月号) 中央公論社
- 松本健一 2000『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波現代文庫
- 三島由紀夫 1963「林房雄論」『新潮』(1963年11月号) 新潮社
- 2004「林房雄宛葉書」『三島由紀夫全集 35巻』新潮社
- 山田宗睦 1965『危険な思想家 戦後民主主義を否定する人々』光文社カッパブックス

要 旨

本論文は、「戦後」において「明治」を見直す動きを、桑原武夫と竹内好の言説を対象に議論している。桑原と竹内が、「もはや戦後ではない」昭和 31 年＝1956 年を境に行われた「明治の再評価」をめぐる議論の意味を指摘する。

「明治の再評価」を最初に唱えた一人・桑原にとっての「元号」は、西暦とは異なる、日本固有の時間の積み重ねだった。それは同時に、昭和 20 年＝1945 年に始まる「戦後」という時間軸よりも、「昭和」や「明治」という時間の蓄積に親しみを抱く世間の空気でもあった。そして、桑原もまた、「元号」と同様に、世の中の雰囲気や鋭敏に察知するアイコンでもあった。

対する竹内は、「昭和」という「元号」を称揚する復古的な動きに嫌悪感をあらわにし、「明治」を否定的に回顧しようとしつつも苦悩する。「明治維新百年祭」を提唱した理由は、その百年の歴史が、自分たちが生きる今の基盤になっていると考えたからこそ、苦悩し、ジャーナリズムでさかんに発言する。

このように本研究では、「明治百年」についての複数の言説の中で、日本近代に対峙した代表的な 2 人の論客が「元号」に依拠して明らかにした歴史意識を対象として、当時の知識人と社会、学問とジャーナリズムの関係性もまた見通している。

キーワード：歴史意識、元号と西暦、時代区分、明治百年、戦後

Abstract

This paper is discussing about the movement of revival the “Meiji” in post-war era, focusing on attitude of two intellectual elites; Takeo Kuwabara and Yoshimi Takeuchi.

Kuwabara who is totally forgotten today, by contrast, Takeuchi still remains as an influential figure in Japanese academic society. What determined the destiny of these two?

The pivotal point is found in the famous sentence “there is not a post-war anymore now” appeared in the economic white paper of 1956.

For Kuwabara who would like to advocate a “re-evaluation of the Meiji”, “Gen-go” (Japanese name of era) is a symbol of unique history of Japan which is very different from that of the West described by A. D.

This is because periodization by “Gengo” (ex. “Showa” and “Meiji”) is more familiar for ordinary Japanese at that time than by “pre-war” or “post-war”, and he keenly felt it.

Therefore Kuwabara is remembered by people today only as a good observer of the time.

On the other hand, Takeuchi tried desperately to express his loathing for “Showa” and the revival boom, examining “Meiji” era in a negative way.

Despite being a proposer of “Centennial Meiji Restoration”, he himself confused by the magnitude of that event.

Because he knew it is the history accumulated after “Meiji Restoration” which defined his identity.

Both two intellectuals facing the Japanese “modern” had shown their historical consciousness in a series of discourse about “Centennial of Meiji” and “Gen-go”. These are the very typical figures suffering in the Japanese “modern”.

Keywords : Historical Consciousness, Periodization, Post-war